

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

日中の曲水宴及び草餅に関する比較民俗学的研究  
A Comparative Folklore Study on the Traditions of  
Qushui /Kyokusui Gatherings and Kusamochi  
in China and Japan

2022年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
陳 翰希  
CHEN, Hanxi

研究指導担当教員： 谷川 章雄 教授

# 日中の曲水宴及び草餅に関する比較民俗学的研究

## A Comparative Folklore Study on the Traditions of Qushui/Kyokusui Gatherings and Kusamochi in China and Japan

陳 翰希 (CHEN, Hanxi) 指導：谷川 章雄

本論文は、日中両国の曲水宴および草餅に関する比較民俗学的研究である。

中国の三月三日・上巳は古代の祭祀と習俗に起源を持ち、後漢以降の上巳禊祓、魏や西晋以降の曲水宴、または季節的な桃の花や儀礼食の龍舌料など、時代の変化と共に、行事内容・要素の継承あるいは変容がみられた。

一方、日本においては、7世紀初期に曲水宴を同時代の中国の三月三日行事として受容し、平安初期までは頻繁に行われていたが、その後は停廃や中断の時期があり、11世紀以後はほとんど行われなくなった。平安中期以降は上巳の祓が出現し、贖物の人形が使用され、鎌倉・室町時代にかけて民衆に広がり、後の江戸時代の雛祭りにつながった。また、日本における三月三日の草餅も中国の龍舌料に由来し、曲水宴の受容とともに定着したが、行事内容が上巳祓や雛祭りに移った後は、それにあわせて形を変えて現在に至っている。

曲水宴は、日中両国の三月三日行事の接点に位置しており、日本の上巳祓や雛祭りにもつながる重要な行事である。一方、草餅も儀礼食でありながら、曲水宴の時代より雛祭りまで一貫して三月三日にともなうものであった。しかしながら、従来の三月三日の研究においては、歴史的背景に沿って、歴史記録、庭園、漢詩、貴族日記、民俗資料などを総合して、日中の曲水宴および草餅の実態を復元した研究はほとんどみられなかった。本論文は、このような問題意識から、曲水宴および草餅の実態を復元した上でその変遷の過程を解明し、日中両国の比較を試みるものである。すなわち、中国より伝来された曲水宴と草餅が、いかに日本で定着、展開したかを研究の主眼とする。

中国の曲水宴は後漢における自然河川の上巳禊祓に由来したが、魏の時代に、皇帝園林としての華林園が都の洛陽に造営され、作詩を伴う皇帝主催の曲水宴もその中で行われた。次の西晋も華林園の曲水宴行事を継承し、その後、南と北の王朝に分裂しながらも、「華林園」が各都に造られ、皇帝園林における曲水宴は統一国家としての隋・唐まで続き、1つの伝統となった。また、唐における三月三日の曲江宴は、曲江池という舞台に皇帝から庶民までが集まり、曲水宴の最高峰と思われる。そのほか、西晋からはじまった私家園林における曲水宴も後代に継承され、東晋王

羲之の蘭亭集会影响でさらに広まった。以上のような過程のなかで、漢代に確立した上巳の禊祓の意味が次第に弱くなり、特に庭園における曲水宴は、政治的意味を持つ集会または文人の風雅の行事になっていった。

日本の曲水宴は7世紀初頭、大陸との外交において始まり、律令制の確立にしたがって節宴である宮苑曲水宴として成立した、政治的意味が強い遊宴である。9世紀の皇徳讚美を中心に置く宮苑曲水宴は、流杯曲水行事、音楽演奏、作詩、身分による賜禄などをともなう行事として完成した。

その後、桓武天皇の長岡京・平安京遷都以後も曲水宴が引き続き開催されたことは、曲水宴が宮廷伝統の一部になっていたことを示している。また、長屋王邸や藤原宇合などの私邸曲水宴の事例も8世紀初期以降に出現したが、宮苑曲水宴より政治性が薄い文人集会のようであった。

9世紀初期の平城朝の曲水宴停廃詔によって、長らく継承されてきた従来の朝儀的な曲水宴は絶えることになり、嵯峨朝、宇多朝、村上朝において再開された曲水宴も朝儀的なものにはならず、天皇の趣味によって催されたに過ぎなかった。

また、唐風から国風への文化的変遷を背景としたこの約150年間に、曲水宴の形式はそうした文化の影響を受け、10世紀半ばの村上朝曲水宴の段階には日本化を遂げることになった。この「日本的」再編によって、曲水宴は宮廷の伝統として更に深く定着し、後世の曲水宴の基礎となった。この時期の曲水宴は、史料上で明確にわかる天皇主催の宮苑曲水宴の最後の事例であった。

撰関期以降の曲水宴は、時代の政治的、文化的動向に従ってさらに変容した。寛弘四年(1007)の藤原道長の曲水宴は、御燈日に道長の土御門第で催され、公卿や文人が参列したものであった。行事の内容は儲座、就座、詩題、流觴曲水、入夜昇上、流辺清書、披講、賜物などが行われて、村上朝曲水宴を一部継承しながらも独自の展開がみられ、翌四日まで行事が続いた。撰関家による道長の曲水宴は、臣下の曲水宴とはいえ、身分的制限は村上朝の天皇主催のものと同様に厳格であり、道長の政治的権威が強調されていた。一方、道長が流杯行事に直接参加したことからは、王羲之のような文人集会への志向も読みとれる。

院政期における寛治五年(1091)の藤原師通の曲水宴は、

関白師實の六条殿で行われ、行事の内容は道長の曲水宴の一部を継承し、詩題においては村上朝の曲水宴に倣った。そのほか、公卿たちによる音楽演奏と関白師實の見物など独創的なところもあった。また、現存する漢詩には撰閑家を讃える表現が多くみられ、師通は曲水宴に撰閑家の復権を託したことがうかがえるが、背景に貴族層が継承していた文学的教養があったことも看過できない。

鎌倉幕府成立後の13世紀初頭に、九条良経は邸宅である二条殿で曲水宴を開催する計画をたてた。行事の内容および詩題の確定について再三議論が繰り返され、良経をはじめとした公卿たちは、武家の世になっても熱心に従来の曲水宴の伝統を継承しようとしたが、良経の急死によって計画は中止された。

また、11世紀に頻繁に行われた三月三日の詩会は、流杯行事の曲水宴を次第に「曲水」としての文学的意象に変化させ、曲水宴が終焉を迎えても、その「曲水」は後に和歌・俳句に幅広く吸収され、日本文学化することになった。成立当初における漢詩＝貴族＝曲水宴の構図は、時代の変遷とともに変容し、漢詩・和歌・俳句＝公家・武士・文人＝曲水宴・曲水文学といった包括的な構造になった。古代から中世への時代の変化にともない、古代的・律令的な制限が失われ、日本的・文学的・美学的なものへと変容したのである。

以上述べてきたような日本の曲水宴の変遷は、成立期、繁栄期、変容期、衰退期の4つの時期に分けることができる。7世紀初期から8世紀初期の約100年を日本曲水宴の成立期、8世紀前半の聖武朝から、桓武朝が終わった9世紀初頭までを繁栄期、9世紀初期の嵯峨朝から10世紀半ばの村上朝までを変容期、11世紀初頭より13世紀初頭までの約200年を曲水宴の衰退期区分する。

古代中国における三月三日の儀礼食は、6世紀の文献に現れる「龍舌料」とされている。ハハコグサで作られた龍舌料は、季節の変わり目の疫病を予防する役割を果たし、疫病を祓う意味を持っていた。当時の三月三日は「流杯曲水」であったが、それより前の漢の時代には上巳の「洗濯祓除」であり、龍舌料の疫病を祓う意味は洗濯祓除を継承していた。宋以降、上巳節は次第に衰退し、高麗王国の上巳にはヨモギが使われる小麦粉製の儀礼食が出現したが、中国では「龍舌料」のようなものが寒食という別の節日に食された。明以降、一部の地域を除けば、上巳や寒食もほとんど清明節に代わり、ヨモギなどが使われる艾糰、青团は清明節の儀礼食として定着し、現在に至った。

日本において、中国の節日や儀礼食の伝来とともに、9世紀の平安初頭には「草餅」に関する記録が現われた。当

時の草餅は「龍舌料」と同じくハハコグサを使用していた。中国の周の幽王の伝承も書籍を通じて日本に伝わっている。

平安末期に曲水宴は衰退し、上巳祓いが次第に三月行事の中心となった。疫病退治の上巳祓いは鎌倉時代、室町時代を通して民衆に広がり、室町時代の草餅に疫病祓いの意味合いが生まれ、また、ハハコグサの草餅がヨモギの草餅に代わった。

江戸時代に入り、三月三日には装飾用雛が現われ、やがて雛祭へと発展した。この時代の草餅は次第に装飾的な菱餅へと変化した。明治から昭和の民俗資料において、三月三日の行事は流し雛や男子の三月節供など都市の雛祭りとは異なる事例があり、地方における三月三日行事や草餅の多様性を示している。現在の三月三日草餅の様態には、地域伝統的な「無病息災」の意味を持つ流し雛に使う菱餅もあれば、新たに現われた現代のイベント的な「草餅つき会」などがあり、異なる三月三日の意味をもつようになった。

最後に、本論文のまとめとして、日中両国の曲水宴および草餅の比較を行った。日中両国の曲水宴はその性格によって、華林園系統、王羲之系統、撰閑家系統の3つに分けられる。皇家園林・宮苑で行われた曲水宴は華林園曲水宴の系統に分類でき、それらの曲水宴は政治の動向、及び権力者である皇帝・天皇の意思に左右されるところが大きい。一方、王羲之系統の曲水宴は、曲水宴に高度な思想を賦与し、詩・文と曲水宴とのさらなる結合でもあった。日本においても、奈良時代の私邸曲水宴、撰閑後期の三月三日詩会にはその面影がある程度うかがえる。撰閑家系統は、当該時代における宮苑曲水宴の没落、延喜以降の行事の整備、撰閑家への財力の集中、造園趣味の動向、貴族層の作文、故実の整理及び貴族日記の流行など、様々な影響の下で成立した日本特有の系統であった。

草餅の場合をみると、「龍舌料」を継承した日本の草餅も中国本来の脈絡から逸脱したものであった。室町時代の神仏習合の中で新たな意味が賦与され、また江戸時代の雛祭りにともなって草餅は菱形に変わり、後には三色の菱餅に発展した。各地における多様な三月三日にもなる草餅も、地方行事の中に再編され、日本の儀礼食として完成を遂げたのである。

本研究では、日本の曲水宴と草餅が中国の曲水宴・龍舌料を源流としながら、時代とともに受容または変容し、柔軟性に富んだ独自の展開を遂げたことを明らかにした。これは、日本における中国文化の歴史的位をを示す好例であり、日中の文化交流史の研究において一つの視座を示すものであろう。